関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

阿波踊りにおけるパフォーマンス空間の変容に関する研究

著者	坂東 裕介, 木下 光, 丸茂 弘幸
雑誌名	都市計画論文集
巻	42
号	3
ページ	31-36
発行年	2007-10-25
その他のタイトル	A Srudy on the Changes of the Performance Space in Awa-Dance
URL	http://hdl.handle.net/10112/2781

（社）日本都市計画学会 都市計画論文集 No. 42-3 2007年 10月
Journal of the City Planning Institute of Japan No. 42-3, October, 2007

6. 阿波踊りにおけるパフォーマンス空間の変容に関する研究

A Study on the Changes of the Performance Space in Awa-Dance

坂東裕介*・木下光**・丸茂弘幸**
Yusuke Bandou・Hikaru Kinoshita・Hiroyuki Marumo

This study aims to grasp the changes of the performance space in Awa-Dance. The following five things have become clear. (1)The performance space in Awa-Dance can be divided with the public space used, the administration, the dance group, and the device of temporary housing at four time.(2) The first period, in the dance group by the ground edge, it danced in the street and unoccupied land in the region. (3) The second period, the device of the temporary housing for the dancer and the looking person was made. (4) The third period, a large-scale performance space for sightseeing can have been done. (5) The fourth period, there is movement to return to the dance of the region as the first.

Keywords: Awa-Dance, performance space, sightseeing, administration, community, public space
阿波踊り、パフォーマンス空間、観光、運営管理、コミュニティ、公共空間

1－1．研究の背景と目的

日本全国には地域に根ざした祭りが数多くあり、それらは都市の賑わいを創出する重要な要素の一つとなっている。また、祭りの際、その舞台となる都市の公共空間の使われ方は劇的に変化する。阿波踊りもそのような祭りの一つであり、本研究で論じる徳島市の阿波踊りは、戦前、戦後、現在とではパフォーマンス空間に大きな違いが見られる。本研究においてパフォーマンス空間とは阿波踊りを踊る空間、踊りを見る観客のための空間を表す。このパフォーマンス空間の変化の過程において、踊りを支える運営組織や管理方法、パフォーマンスの舞台となる都市の公共空間の変化を見ることができる。既往研究として吉井藤重郎らによる阿波踊り研究[2) 3) 5) 8) 9)]が数多く行われているが、社会学や民俗学、歴史学の観点から論じたものであり、阿波踊りのパフォーマンス空間に関する研究は行われていない。

そこで本研究は、地方都市の公共空間のあり方における祭りの意義を検討する基礎的な知見を得るために、以下の二点を目的とする。①阿波踊りの時代毎のパフォーマンス空間の特性を明らかにする。②パフォーマンス空間の変化を通して、都市の公共空間の変化が阿波踊りの行われる場所にどのような影響を及ぼしたかを明らかにする。

1－2．研究の対象と方法

現在阿波踊りは、徳島市をはじめ県内各地で行われるが、最も規模が大きく、歴史が古いのが徳島市の阿波踊りである。そこで本研究では徳島市中心部で行われる阿波踊りを対象とし、阿波踊りに関する文献調査[1)]を行い、補足資料として、徳島新聞[(1)]、（社）徳島市観光協会発行の資料[(2)]を利用した。また阿波踊りの運営を行う（社）徳島市観光協会へのヒアリングや2006年度の現地調査[(3)]で補った。

1－3．阿波踊りの歴史

阿波踊りの起源に関しては、築城記念説など諸説あるが、霊魂を鎮める精霊踊りであったとすると、その起源は鎌倉時代にさかのぼる[2)]。藩政中期において、徳島の盆踊りは宗教性を脱却し、町民だけに許され、藍商の力の増大とともに発展したが、藩によって踊る場所などを厳しく管理[(4)]された。明治・大正から昭和初期にかけて庶民芸能の普及と共に、県内各地に広がり、盆踊りは庶民娯楽として徳島県最大の年中行事となった。昭和に入ると、新聞、ラジオで全国に知られるようになり、徳島の盆踊りは新しく阿波踊りという名で観光客を呼び込むようになった。現在、徳島市では毎年8月12日から15日の4日間開催される。毎年この4日間、徳島市は阿波踊り一色に染められる[3)]。

1－4．パフォーマンス空間による時代区分

阿波踊りのパフォーマンス空間の変化は利用される公共空間や運営管理、仮設の装置、踊り集団によって、5つの時期（図-1）に分けることができるが、明治期以前の盆踊りは公共空間との関係性が薄いため研究対象外とし、本研究では明治期以降の4つの時期を対象とする。

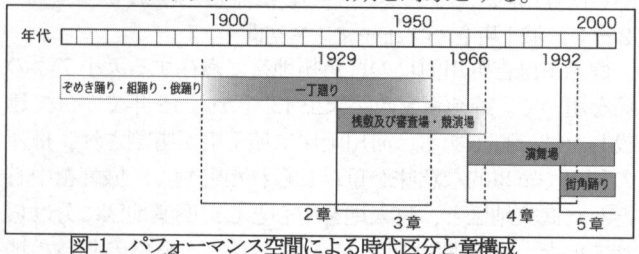

図-1 パフォーマンス空間による時代区分と章構成

①一丁廻り期[(5)]：一丁廻りとは地域単位で踊り集団を作り、地域の街路や空地で踊ることである。

②桟敷及び審査場・競演場期[(6)]：桟敷とは、踊りを見るための木造仮設の客席で、審査場とは踊りに優劣をつけるパフォーマンス空間のことである。また、桟敷のつくり方や規

*正会員 株式会社阿波銀行 The Awa Bank
**正会員 関西大学 Kansai University

模が変化し、競演場へと呼称が移行した。

③演舞場期：演舞場とは競演場の規模がさらに大きくなったもので、現在もこの演舞場が阿波踊りのパフォーマンス空間の中心として定着している。

④演舞場・街角踊り期：街角踊りとは、かつてあった地域の踊り、すなわち一丁廻りの理念が復活したもので、演舞場と並行して街角踊りが行われている。

2．一丁廻り期（明治初期～1950 年代中頃）

2－1．地域の踊りとしての一丁廻り

明治時代になると盆踊りの開催許可権限を警察が引き継ぎ、町民の代表が上願し、許可を得ていた。それは戦前まで続いた。踊り集団は地域に帰属する集団で形成され、各々の踊り集団は自分たちの地域周辺の街路や空地を利用して踊り歩き、その踊りは、一丁廻り（写真-1）と呼ばれた。この踊り集団は主に丁目の範囲で形成される集団であり、基本的に街区を構成する 4 つの通りを回遊するように踊っていた。藩政期、藩は商業の統制のために、職業ごとに住む地域を分けた。明治期以降、市中心部ではほぼそのまま町へと引き継がれた。職業と町の単位が同一、または類似していたため、その集団には一定のまとまりがあり、踊り集団の統率者がいた。踊りが広まってからは、市中心部以外の場所でも、町や丁目を基本とした踊り集団が作られた。

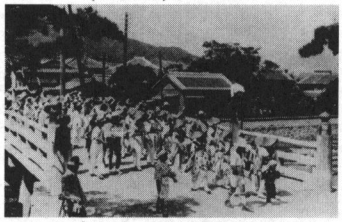

写真-1　一丁廻り（1928 年）

2－2．観光資源としての流し

一丁廻り以外の踊り集団として、芸子衆[4]がいた。それは、大正期に入ると商業会議所が観光資源として、阿波踊りに力を入れ始め[7]、芸子による踊りが一丁廻りよりも前面に出てきた。商工会議所からの要請を受け、秋田町、内町、富田町の芸子が中心となって踊り集団を形成していた。芸子衆はＰＲのために、市役所や知事公舎などをめぐりながら徳島市内広域を歩き、その姿は流しと呼ばれた。

2－3．城下町とパフォーマンス空間

徳島市は吉野川河口の三角州地帯に点在する大小７つの島を用いて、蜂須賀家政が天正 13 年から 15 年にかけて建設した城下町である。河川両岸に城下町が町割され、舟運の利用や軍事的な意味が重んじられた町割で、城郭を中心とした武家地区と、町人地を中心とした商業地区に分けられていた。藩政期は図-2 に示すように、町屋のあった地域のみで踊っていた。明治期に入り踊りが広まると、町屋、武家屋敷とは無関係に徳島市内全域の街路や空地で踊る姿がみられるようになる。1899 年には鉄道を経済発展の原動力とし、駅を都市の新しい核と考え、城郭と中心商業地、眉山を結ぶ軸線上に寺島川を埋め立てて駅が置かれた。城郭は結果として中心市街地と分断された[6]。明治期以降今日に至るまで、鉄道の南側にあたる町屋地域が商業地域として大きく発展した。それによって、駅南側は表として発展し、藩政期に都市の中心であった城郭は裏になった。城郭を含む駅北側の地域では、駅南側に比べて、パフォーマンス空間として活用されることは少なかった。

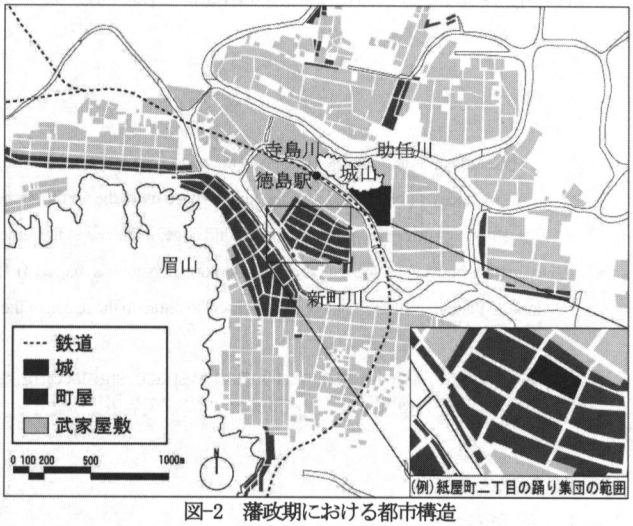

図-2　藩政期における都市構造

3．桟敷及び審査場・競演場期（1929 年～1960 年代後半）

3－1．観光化

祝踊りとは、盆の時期以外に踊られた踊りのことで、徳島市開市十周年祝踊り（1889 年）や御即位奉祝踊り等があったが、1928 年に盛況だった祝踊りを受けて、翌 1929 年、徳島商工会議所は阿波踊りを本格的に観光資源として売り出そうと、大々的に宣伝に乗り出した。徳島市や鉄道、警察等の代表らを招き、踊り振興策を協議した[8]。1928 年から 1936 年まで徳島商工会議所および徳島観光協会が願い主[9]を務め、実質上の主催者となった。しかし、1937 年から 1945 年まで阿波踊りは中止となった[10]。1946 年以降、戦後復興と相まって、阿波踊りは盛り上がりを見せた。1947 年、県商工会議所と徳島市商店連盟が共催で阿波踊りを運営し、その後は運営組織に県観光協会、新聞社、各商店連盟等様々な団体が協力、参加した。1955 年頃からは踊り協会[11]も加わり、官民一体となった祭りとなった。

3－2．連の誕生

戦災の影響や企業中心のコミュニティの形成によって町や丁単位の共同体は力を失った。そのため、町内の住民だけでは踊り集団をまとめることができなくなった。これを受けて、踊り集団は以下の二つに大別されるようになった。

①連：観光化にともなって、阿波踊りにも県外から観光客が訪れるようになった。これによって、観客に見せるという観点や競技としての側面を有するようになり[12]、踊りの質が変化した。そのため、踊り集団の構成員は以前のような町内という狭い地域性をこえて、広範囲から集まるようになり連という踊り集団がうまれた。これによって、地縁による従来の踊り集団も一つの連となり、それに加えて地縁とは異なるつながりによる様々な連ができた。当初、連は、その規模も小さかったが、踊りが定着するにつれ、段々と規模も大きくなった。

②連に所属しない人・観光客：連が踊り集団の中心になっていったが、観光化と比例して増加する観光客や連に所属していない人が、気軽に阿波踊りに参加していた。

3－3．パフォーマンス空間の特性

戦前は街路や空地を利用することが主流だったが、観光化が始まった 1929 年からは、踊り手を盛り上げるために審査場を設け、優勝旗や賞金を渡し始めた。また、観光客のために桟敷を設けるようになった。戦後も戦前のように審査場が設けられた。しかし、審査場は審査場だけに踊り子を集め、審査場以外では踊る姿が見られなくなった。そのため審査場をやめ、以前の街路を利用する踊りに戻そうとする動きがあった。1953 年から 2 年間は審査場や桟敷の設置をやめたが、1955 年には観光客のために桟敷が再び設置された。1956 年以降、踊り手から盛り上がりの場所が欲しいとの要望があり、審査場及び桟敷に代わって、審査をしない競演場が設けられるようになった。そして、競演場だけでなく、以前のように街路での踊りを意識し、競演場間をつなぐように踊りのコースが作られた。1964 年からは徳島市文化センターで前夜祭が設けられるようになり、有名連が出演し、舞台から観客を喜ばせた[13]。しかし、このことが踊りを観客に見せるという意識を強めたため、連に所属しない人と所属する人の違いを際立たせ、その結果、連に所属しない人は競演場で踊りにくくなった。

①審査場：街路や空き地を利用し、踊りが審査しやすいように踊りを見る場所を設けた。このことにより踊りを見せる意識が生まれた。（写真-2）

写真-2 審査場(1947 年)

②桟敷：初期のものは一丁廻りを見る、木造仮設の見物席だった。観光化のなかで規模が大きくなっていった。（図-3）審査場と桟敷は、同時に設けられる場合もあった。

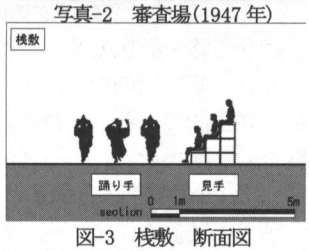

図-3 桟敷 断面図

③競演場：より多くの人を収容できる桟敷席を含むパフォーマンス空間で、広幅員道路や大規模な公園を利用して作られた。呼称によっては観覧席と呼ばれることもあった。

3－4.戦災復興計画とパフォーマンス空間の立地

戦前、審査場や桟敷は、新町川の塀裏埋め立て地（現在の南内町）や市役所前などに置かれた。戦後、全体の運営は前述のようにある程度まとまった組織が行っていたが、桟敷や審査場は商店街や旅館連盟などの各スポンサーが中心となり設置・管理した。徳島市内の広範囲に、審査場は設けられたが、踊り子の踊りやすさや集客力のある徳島市内中心部に集中するようになった。審査場は、1936 年には 7 カ所設けられた。1937 年、都市計画法が施行され、徳島では城下町の形態を基礎とし、グリッド状の街路網が作られた。その際、紺屋町や両国本町に代表されるように狭かった道路が 12m・18m の都市計画道路に変更された。1955 年の戦災復興計画(図-4)では、駅前広場から眉山への新しい軸線をシンボルとして捉え、50m の広幅員道路を開設した。その他の街路は旧都市計画法施行時に制定した都市構造を継承したものになっている。戦災により新町川の北側にあった数多くの藍蔵も消失したが、戦災復興計画により公園として整備された。徳島駅から眉山へと続く 50m道路上には、より規模の大きくなった競演場を設けることができた。これらの都市計画、すなわち道路幅員の拡大や公園の整備は、今まで不可能であった道路上や空地に仮設装置である桟敷や審査場を設置したり、それらの規模を大きくしたりするきっかけとなった。

図-4 戦災復興計画における徳島市の都市構造

表-1 パフォーマンス空間の立地の変化(1945 年～1971 年)

			45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71
市中心部	徳島駅前	道路			○																								
	市役所前	道路		○									○		△	△	△	△	△	△	△			□	□	□	□	□	□
	新聞社前	道路												□	△	△													
	八百屋町	道路							○					□	△	△	△	△	△	△		△	△						
	藍場浜西	道路																									□		
	紺屋町	道路							○	○			○			△	△		△	△	△	△	△	□	□	□	□	□	□
	両国橋通り 両国本町	道路			○	○		○		○				□	△	△	△		△	△			△	□	□	□	□	□	□
	南内町(新町川) 両国橋北詰公園	道路																			△	△	△		□				□
	新町橋	道路								○											△	△		□	□	□	□	□	
	元町	道路					△	○		○			○																
	東新町	道路						○	○																				
	籠屋町	道路				○																							
	幸町	道路																											□
	天神下	道路											○																
	春日橋通り	道路																								□	□		
	東大工町	道路																						□					
	秋田町	道路																										□	□
	新内町	道路												□															
	内町	道路							△																				
	藍場浜 藍場町	公園																		△	△	△	△	□	□	□	□	□	□
	両国橋南公園	公園																	△					□					
	文化センター横	空地																							□				
市郊外		箇所	0	0	0	0	1	3	8	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
踊りコースあり											●	●	●		●				●			●	●		●				●

注1) 表は1945年～1971年の阿波踊りの期間中の徳島新聞を参考にした。
注2) ○は桟敷・審査場、△は競演場、□は演舞場、●は踊りコースがあったことを表す。

また、審査場を廃止した 1953 年以降の数年間は、交通整理のしやすさを考慮にいれルート設定を行なった。その後も交通事情に配慮し、競演場だけに人が集まらないように、ルート設定が行われた[7,8,9]。（表-1）

図-5 は桟敷及び審査場によって運営された時期の例とし

て 1951 年、桟敷及び審査場に代わって競演場となる時期の例として 1964 年のそれぞれの立地を示している。

①1951：中心市街地における 7 カ所の桟敷及び審査場（図-5）は、駅前や商店街など集客が予想される場所に設置される一方で、地域の祭りが意識されたために 4 カ所では広域的に設けられた。（表-1）

②1964：1963 年から 50m の広幅員道路に競演場が設置され、５ヶ所の競演場（図-5）をつなぐ右回りのコースが設けられた。表-1 からも明らかなように桟敷及び審査場の時期に比べて、紺屋町や藍場浜のようにいくつかの場所では競演場がほぼ毎年設置されるようになる。1965 年まで最大のパフォーマンス空間であった八百屋町は、国道 192 号線の交通量の増加により設置されなくなった[14]。

図-5　パフォーマンス空間の立地（1951 年、1964 年）

４．演舞場期（1965 年~1990 年代中頃）

４－１．観光の定着

1966 年頃から阿波踊り運営委員会が発足し、県、市、警察等の関係機関、団体と協力し、阿波踊りの運営管理の統一を図ろうとした。1972 年、阿波踊りの運営を統一すべく（社）徳島市観光協会が発足した。1972 年から現在まで（社）徳島市観光協会と徳島新聞社が共催で、毎年祭りの期間中に阿波踊り実行委員会を創設し、これまで演舞場ごとに行っていた設置や管理も統一して行っている。このことは観光が最優先の運営管理体制が強化され、全体を一つの祭りとしてとらえるようになったことを示している。

４－２．多様化する連

阿波踊りの規模が大きくなり、連という踊り集団が定着するなかで多様な縁を背景とする連が生まれた。分類すると以下の４つに分けることができる。

①有名連・一般連：踊りを中心とし作られる連である。有名連は踊り協会[15]に所属し、積極的に阿波踊りに参加する連であり、観光に多大な貢献をしている。観光が定着するなかで、有名連の踊りはイベント化したが、阿波踊りに必要不可欠なものとなった。一般連は阿波踊り協会に所属しない連を表す。

②企業連・学生連：企業や大学等の社会集団の繋がりを基礎に作られる連である。

③地区連：自治体を 中心にして作られる連である。

④にわか連：1978 年以降、連に所属しない人や観光客のために、阿波踊り当日作られるその場限りの連である。有名連に指導を受け、有名連と一緒に演舞場で阿波踊りを踊ることができる。しかし、にわか連ができて以降、以前のように演舞場に飛び入りで踊る姿は見られなくなった。

４－３．パフォーマンス空間の特性

1966 年頃からパフォーマンス空間は演舞場と呼ばれるようになり、さらに多くの観客を収容するため、観客席の規模が大きくなっていった。1972 年に運営組織が統一されてからは、演舞場は無料・有料で分けられるようになり、踊りコースを廃止した。また、昔の踊りを意識して演舞場の近くには、1973 年に初めて公共空間を利用した踊り道路や踊り広場が設けられた。

①有料・無料演舞場：踊りの規模[16]が大きくなったことにより、今まで演舞場で見ることや踊ることができなかった多くの観客や踊り手のために、その規模を大きくしたものである。有料演舞場は、有名連や大規模な企業連等の踊る観光の中心となるパフォーマンス空間になっている。観客席の段数を多くし、より多くの客席を設け、広告看板等を設置した。（図-6）無料演舞場は有料演舞場に入れない連や観光客のためのパフォーマンス空間であり、固定の観客席をあまり設けない自由席を中心とする。（写真-3）

写真-3　両国本町無料演舞場

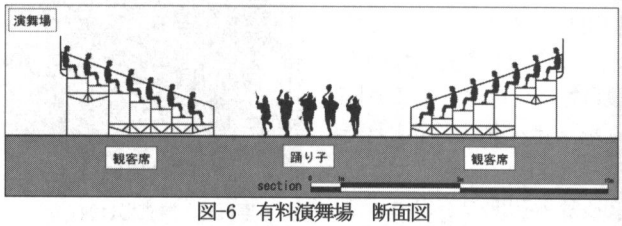

図-6　有料演舞場　断面図

②踊り道路・踊り広場：演舞場周辺において自然発生的に生まれ、観客席のない照明のみ路上に用意されるパフォーマンス空間である。演舞場だけでは踊り足りない連が、観客との距離が近いこのパフォーマンス空間で踊る。

４－４．公共空間の整備とパフォーマンス空間の立地

戦災復興計画により道路網が整備された後、県や市は公園や公共施設の設備に重点を移した。元来、戦災復興計画において新町川北側に公園緑地が計画されていたが、その一部が住民により占拠され、計画通り公園とすることができなかった。そのため 1964 年に立ち退きを完了させ、1967 年に公園として整備した。1980 年代からは駅前に大型店舗の出店が相次ぎ、駅前に商業中心地も移動した。中心市街地の商業地域の活性化を考え、徳島市は 1986 年に親水都市を目指し、1967 年に北岸を公園とした新町川両岸の一体的な整備に着手し、その両岸は親水公園となった。演舞場の立地は都市計画道路上や以前からある市役所前、

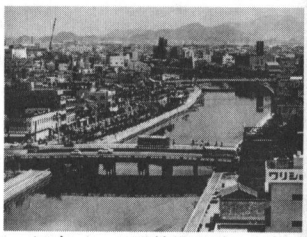
写真-4　公園整備が進んだ新町川北岸　（1967 年）

公園内と基本的に変化はなく、新町川をはさんで点在している。(表-2、図-7・8・9) それに対して 1973 年以降、新町川公園や元町は演舞場に近いため、踊り広場や踊り道路として利用され始めた。特に新町川公園が踊り広場となる理由は、都市軸である 50m 道路と結節し、あらゆる演舞場で踊り終えた連が流れてきやすい東西に広がる形態や立地となっているためである。この結果、パフォーマンス空間は点在する有料・無料演舞場を踊り広場・踊り道路が線状につなぐ構成となった。

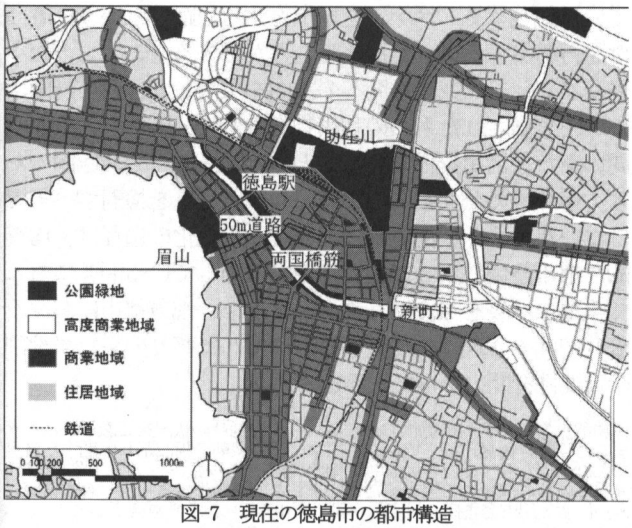

図-7 現在の徳島市の都市構造

表-2 パフォーマンス空間の立地の変化 (1972 年～1991 年)

			72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	～	89	90	91
有料演舞場	市役所前	道路	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	藍場町 藍場浜	道路	□	□		□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	紺屋町	道路	□	□	□		□	□	□	□	□	□	□		□	□	□	□	□	□	□
	交通公園 新町川 南内町	公園		□			□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	仲野町	公園	□																		
	城ノ内 (市立体育館前)	公園			□	□								□							
	天神下 ロープウェー前	道路				■									□						
無料演舞場(踊り広場(踊り道路))	両国本町	道路	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
	元町	道路	△	■	■	■	■	■	■		■	■	■	■	△	△	△	△	△	△	△
	新町橋	道路	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	■		△	△	△	△	△
	幸町	道路	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△					
	両国橋南詰 新町川公園	公園		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	南内町２丁目 水際公園前	公園																		■	■

注1) 表は1972年～2006年の阿波踊り実行委員会発行の阿波踊り運営計画（案）を参考にした。
注2) □は有料演舞場、△は無料演舞場、■は踊り広場（踊り道路）を表す。

図-8 パフォーマンス空間の立地 (1975 年)

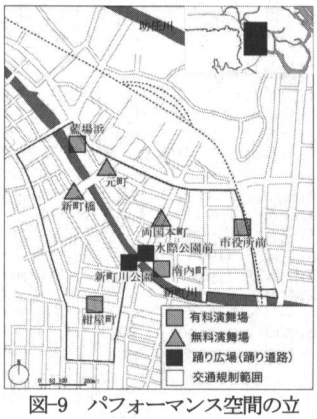

図-9 パフォーマンス空間の立地 (1990 年)

①1975 年：唯一、駅北に演舞場が設けられた例である。空き地に 2 万人を収容する巨大な演舞場が設置されたが、徳島市立体育館の竣工により、わずか 2 年間のみの設置となった。(図-8) これ以降、一部に大きな演舞場を設けるのではなく、都市全体に演舞場を配置するようになった。

②1990 年：1975 年と比較して明らかなように、1990 年になると 50m の広幅員道路、両国橋筋、新町川という徳島市の都市構造における重要な軸線に沿って、有料演舞場を中心とするパフォーマンス空間が展開している。(図-9)

5．演舞場・街角踊り期 (1992 年～)

5－1．地域の踊りへの回帰

運営組織はより多くの観客、踊り手に演舞場を提供してきたが、基本的には 1986 年以降、同じ場所にしか演舞場は設置されなくなった。これは既存の演舞場の設備の充実や更新に力を入れ始めたためである。その一方で、どの演舞場も規模が大きくなりすぎたために、演舞場で踊れなくなった高齢者や子供が増えた。そのため、1992 年からより多くの人に参加してもらえる、地域に近い阿波踊り[17]を行おうと、徳島市の阿波踊りに合わせて、独自の組織で阿波踊りを行う商店街[18]も出てきた。また、独自に阿波踊りを企画・運営する企業もあらわれた。これらの阿波踊り実行委員会から独立した組織の行う阿波踊りは、街角踊りと呼ばれている。現在、阿波踊り実行委員会による阿波踊りと街角踊りによる阿波踊りが並存している[10]。

表-3 パフォーマンス空間の立地の変化 (1992 年～2006 年)

			92	93	94	95	96	97	98	99	0	1	2	3	4	5	6
有料演舞場	市役所前	道路	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	紺屋町	道路	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	藍場町 藍場浜	公園	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	交通公園 新町川 南内町	公園	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
	郷文前	公園									□	□	□	□			
無料演舞場(踊り広場(踊り道路))	両国本町	道路	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△ ■	△ ■	△ ■	△ ■	△ ■	△ ■
	元町	道路	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△ ■	△ ■	△ ■	△ ■	△ ■	△ ■
	新町橋	道路	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△ ■	△ ■	△ ■	△ ■	△ ■	△ ■
	東船場	道路							■	■							
	両国橋南	道路										■	■	■	■	■	■
	両国橋南詰 新町川公園	公園	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	南内町２丁目 水際公園前	公園	■	■	■	■	■	■									
街角踊り	栄町	道路	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲				
	仲之町	道路	▲														
	鷹匠町	道路	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	南新町	道路	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲					
	寺町	道路														▲	▲
	銀座	道路													▲	▲	▲
	徳島城公園	公園						▲	▲								
	四電	空地		▲	▲	▲	▲	▲	▲				▲		▲	▲	▲

注1) 表は1992年～2006年の阿波踊り実行委員会発行の阿波踊り運営計画（案）を参考にした。
表は1990年～2006年の阿波踊り実行委員会発行のパンフレットを参考にした。
注2) □は有料演舞場、△は無料演舞場、■は踊り広場（踊り道路）、▲は街角踊りを表す。

5－2．阿波踊りの新たな取り組み

街角踊りで踊る連は地区連が中心であるが、観光客も気軽に参加できるように努力している。その一方で、有名連を呼び込み、連と観光客を一体化させるイベントとして力を入れているところもある。これは地域の阿波踊りと観光を共存させようとする意識のあらわれである。

5－3．多様な公共空間の利用とパフォーマンス空間

2001 年以降、演舞場の近隣に設置される踊り広場（道

路）の数は増加した。1973 年以降継続的に利用され、踊り広場の代表的な場所となっている新町川公園では近年、段階的に常設の舞台や仮設の舞台が用意されるようになった。また、街角踊りのパフォーマンス空間は運営組織の地域にある商店街、道路、空地を利用しており、ほとんどの場所では、踊り手・見手の関係性をつくる仮設の客席は作っていない。他の街角踊りとの違いをつくるために、幸町のように LED で飾り付けを行うなど特徴的なパフォーマンス空間になるよう努力している地域もある。（表-3）このように、現在のパフォーマンス空間は、演舞場、踊り広場（道路）、街角踊りという三種類で構成され、徳島市の都市構造における重要な軸線に沿うだけでなく、都市計画道路、公園、商店街、空地と多様な場所に設置されている。（図-10）

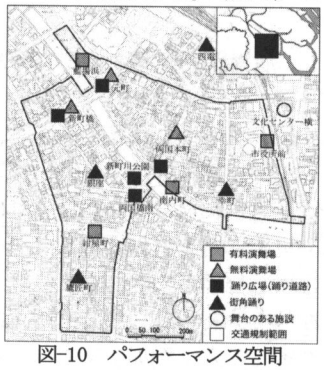

図-10　パフォーマンス空間の立地（2006 年）

6．まとめ

6－1．結論

（1）阿波踊りのパフォーマンス空間は、利用される公共空間や運営管理、仮設の装置、踊り集団によって明治以降、一丁廻り期、桟敷及び審査場・競演場期、演舞場期、演舞場・街角踊り期の 4 つに分けることができる。

（2）一丁廻り期では、その踊り範囲は藩政期における町民地を核として市内全体へと広がった。踊り集団は地域に帰属するコミュニティで形成され、丁目を単位として地域の街路や空地で踊った。

（3）桟敷及び審査場・競演場期では、阿波踊りが観光化し、踊り手・見手の関係をつくる仮設の装置ができた。このことによって、初めて踊りに「見せる」・「見る」の意識がうまれた。旧都市計画法や戦災復興計画によって広幅員道路ができたために、この道路を利用し、桟敷及び審査場や競演場というパフォーマンス空間をつくることができた。

（4）演舞場期では、運営組織や管理体制が統一され、桟敷、審査場、競演場と名称が変化してきたパフォーマンス空間が演舞場として収斂し、確立した。その際、踊り手集団も地域を超えた集団である連が定着し、阿波踊り観光の発展とともに演舞場や連の規模は大きくなった。さらに、公園整備が進んだことによって、点在する演舞場を線状につなぐ役割として踊り広場（道路）が設置された。

（5）演舞場・街角踊り期では、連と演舞場による観光のための阿波踊りが行われる一方で、一丁廻り期のように、地域住民が主体となる街角踊りが行われ始めた。これによって演舞場、踊り広場（道路）とは異なるより小さなパフォーマンス空間である街角踊りが加わり、三つのパフォーマンス空間が様々な公共空間において有機的に展開している。また、この街角踊りには踊り手と見手の関係をこえて、地域住民と観光客が一体となることが意図されている。

6－2．考察

阿波踊りのパフォーマンス空間は、元来、地域に根ざしていたが、地域コミュニティや都市構造の変化、さらには観光化によって地域を越えた大規模なものになった。しかし近年、観光重視によって失われた地域性を求めて、大規模な演舞場から街角踊りに代表される踊り集団の多様化や小さなパフォーマンス空間への回帰が見られる。これは地域を超えた観光価値を維持しながら、阿波踊りが本来有していた地域コミュニティを単位とする盆踊りという位置づけを再構築する試みと捉えることができる。このような小さなパフォーマンス空間への志向を生かして、都市計画によって整備されたものの利用頻度の低い公園などの公共空間の新たな活用を模索することやパフォーマンス空間のあり方を今後の公共空間の整備に活かすことを検討すべきではないだろうか。徳島市の阿波踊りの変化の過程は、均質的な都市整備によって地方都市が直面している問題に対して重要な示唆を与えてくれるとともに、地方都市における公共空間の管理運営やデザインに対して祭りの果たす役割の重要性を問いかけているといえる。

《謝辞》数々の資料の提供および現在の阿波踊りの状況をご教示いただきました（社）徳島市観光協会　十川早苗様、戦前の阿波踊りに関する貴重なお話を聞かせてくださいました相原豊様・愛子様、その他、阿波踊りの貴重な資料の収集にご協力くださいました徳島県土木事務所　森大輔様、徳島出版　川内秀喜様、阿波踊り魂　南和秀様に深く謝意を表します。

《補注》
(1)1945 年～1971 年の阿波踊り期間中の新聞記事を参考にした。
(2)1972 年～2006 年の阿波踊り運営計画（案）を参考にした。
(3)2006 年 8 月 14 日、15 日、阿波踊りによる徳島市の公共空間の利用状況調査を行った。
(4)阿波藩は盆踊りに結集されるエネルギーが暴動化することを恐れ、お触れで盆踊りを規制し、町民の動きを警戒した。
(5)一丁廻りの終わりの時期は徳島新聞 1955 年 8 月の記事による。
(6)桟敷及び審査場・競演場の終わりの時期は 1966 年 8 月の記事による。
(7)徳島毎日新聞大正初期の記事から。参考文献 4）
(8)徳島日日新聞昭和 4 年の記事から。参考文献 4）
(9)願い主とは、警察に踊りの許可を届け出る人などを指す。
(10)1937 年には、2 日間だけ踊りが許されたが、踊り場所は徳島市内の、徳島公園の周辺、津田八幡社、田宮天神などに限定された。
(11)徳島市内の阿波踊り 2 団体を統一して結成された阿波踊り振興協会。
(12)観光客のために、奨励金を出すなどを行い踊り手確保に努め、また盛り上がる場所を作るため審査場を設けるなどしたため。参考文献 4）
(13)徳島新聞 1964 年 8 月の記事から。
(14)徳島新聞 1966 年 8 月の記事から。
(15)踊り協会とは、阿波踊り振興協会、徳島県阿波踊り協会、徳島県阿波踊り保存協会（2006 年度現在）を指す。
(16)1961 年に収容人数 8, 900 人だったものが、1966 年には収容人数 23, 500 人、1970 年には収容人数 30, 000 人と規模が大きくなり、整備された。
(17)1972 年、徳島市の昭和公園に初めて草の根踊りの阿波踊りが行われたが、この祭りは地域の夏祭りの延長上のものであり、徳島市の阿波踊りとは関係性の薄いものだった。
(18)商工会議所の援助を受けて、商店街を中心としたまちづくりを行うところが生まれ、その一貫として、阿波踊りを行ったことが背景にある。

《参考文献》
1)徳島県教育委員会文化（1999）「徳島の盆踊り（阿波踊り）歴史資料目録」徳島県教育委員会文化
2)金沢治（1974）「日本の民俗、36 巻」第一法規出版
3)吉井藤重郎（1984）「阿波踊りの構造-コミュニティ・イベントの研究序説-」人文研究　36 巻・11 号　p837-871　大阪市立大学文学部
4)石川文彦（1999）「新聞に見る阿波踊り—明治から昭和まで—」阿波おどり研究　第 6 号　p34–67　阿波おどり研究会
5)三好　昭一郎(1997)「徳島経済」第 49 号 徳島経済研究所発行
6)佐藤滋（1995）「城下町の近代都市づくり」鹿島出版
7)松本進（1980）「阿波踊り」徳島市観光協会
8)中村久子（1992）「新聞記事に見る戦後の阿波踊り—演舞場の成立を中心に—」徳島大学総合科学　健康科学研究　第 5 巻　p15-31
9)中村久子（1993）「新聞記事に見る戦後の阿波踊り—戦後の阿波踊りを支えたもの—」徳島大学総合研究　人間科学研究　p1-11
10)長尾樹偉　藍澤宏　斎尾直子（2000）「地域社会形成における祭りの有効性に関する研究—阿波踊りを対象として—」日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）p529-530